

ティパサはアルジェの西方70キロに位置する古代ローマの遺跡であり、カミュがこよなく愛した場所である。その名がカミュのテキストに最初に現れるのは、1934年『アルジェ・エチューディアン』に発表された絵画批評においてであり、そこで彼は実際の人生の体験は芸術的表現の中に定着することが可能であることを発見する。

1939年に刊行された『結婚』の冒頭を飾るエッセイ「ティパサでの結婚」においても、風景は外部世界から切り取られた一幅の絵のように提示され、廃墟を舞台として一日の世界との婚礼の儀式が演じられる。咲きこぼれる花々によってもたらされる多彩な色が示すように視覚が優勢を占め、これに聴覚、嗅覚、味覚、触覚が混じり合う。語り手はこうした感覚を自分の身体の各部位において体験する。肉体は過去も未来も知らず、その固有の時は現在である。語り手が関心を示すのは栄華を極めたローマ帝国ではなく、古代の建造物を石へと帰す自然の力である。このエッセイには今日以外の他の日がないのと同様に、ティパサ以外の場所はない。この世界は自足して完成しており、閉じられて、外部からは隔離されている。しかし、最後になって、彼は仲間たちと共有したこの体験を、さらに広い領域へと押し広げようとする。若き日のカミュにとって、ティパサは、一つの人種あるいは民族と共有しうる地中海文化を宣揚するための特権的トポスとなるのだ。

第二次世界大戦後、カミュは3度ティパサを訪れるが、これらの再訪は、1954年に刊行されたエッセイ集『夏』におさめられた「ティパサに帰る」の中で語られている。そこで彼は「ティパサでの結婚」における役割をふたたび演じようと試みる。しかし、今では廃墟に入るには鉄条網をくぐり抜ければならない。風景そのものも変貌し、かつてのあふれるばかりの色彩は単色へと変わり、花々も昆虫も消えた。五感の歓び、とりわけ視覚の歓びがここにはない。しかし、視覚以上に心の内面へといざなう聴覚がここでは重要であり、耳がとらえるかすかな物音が語り手を自分の内部へと導き、外部の沈黙に内心の沈黙が呼応する。もはやここには圧倒するような暑さも、溢れかえる光もない。しかし、語り手は廃墟にいつまでも広がる冬の優しい光を見いだす。ティパサは時間の流れの外に位置して老いることはなく、暗いヨーロッパの歴史によって損なわれることもない。冬のただ中であって、語り手は「不敗の夏」を発見するのである。

1950年代、カミュはティパサから遠く離れていても、何らかの関わりを持とうとし続けた。しかしそれらの計画は実現には至らず、アルジェリアの困難な状況が次第に彼をティパサから遠ざけていった。『手帖』には、ティパサの記述は1952年以降5回現れる。1955年、42歳のとき、カミュは、自分が「そこで生きまたは死ぬことを望んだ場所」の筆頭にティパサを挙げ、また1958年には「僕はやがて死ぬだろう。そしてこの場所は美と充足を放散し続けるだろう。こう考えても、悲しいことは少しもない。反対に感謝と称賛の感情がこみあげてくる」と記すのだ。

1939年、『結婚』出版の年、カミュは、「アルジェ・レピュブリカン」紙の記者として、カビリア地方における住民たちの悲惨な状況を伝える報道記事を書き、植民政策の不正を告発した。また『夏』出版の2年後、1956年、彼はアルジェで「市民休戦」を呼びかけた。アルジェリアの悲劇を、彼は身をもって理解していた。しかしながら、それにもかかわらず、いやむしろそれゆえにこそ、彼は青春のシンボルであるティパサを、歴史の動乱を越えた位置に置くことを願ったのである。